日時
令和8年
12/6(日)
9:30～12:00
場所
天理駅南
団体待合所

歯とお口の市民公開講座

（令和8年度 山辺・天理歯科医師会 主催）
（第17回県民公開講座 奈良県歯科衛生士会 共催）

参加無料

歯と口腔の健康づくり
～子供の未来を守るため～

先着100名様にお楽しみグッズプレゼント

奈良県歯科衛生士会ブースイベント

講演前 9:30～10:00　講演後 11:30～12:00

興味のあるブースを回ってね

1. お口の知識クイズと相談（歯科衛生士）
2. 口腔機能チェック
3. 舌筋力チェックゲーム
4. お口の潤いチェック



ブースに来られた方には
口腔衛生グッズプレゼント

（状況により変更になる可能性があります。）

特別講演

10:00開演

赤ちゃんの「食べる」を育てるということ
―「食べる」から見えてくる、子どもの発達―

講師　堀尾 麻衣 先生（THDC合同会社 代表　口腔総合カウンセラー）

「片足だけでずりばいをする」
「手づかみ食べを嫌がる」
「なかなか噛めず、丸飲みしてしまう」
「いつもお口がぽかんと開いている」

病気があるわけではない。発達に大きな遅れがあるわけでもない。けれど、子育てをしているお母さんや、日々子どもたちと関わる支援者だからこそ感じる、「なんとなく気になる」という小さなサインがあります。

私はこれまで、多くの子どもたちの「食べる」を見てきました。

そこで感じてきたのは、幼児期に見えてくる「噛めない」「丸飲みする」「口が開く」「食事中の姿勢が崩れる」といった困りごとは、ある日突然始まるものではない、ということです。

子どもの「食べる」は、生まれたその日から始まっています。

赤ちゃんは、母乳やミルクを吸い、飲み込み、呼吸をします。口や舌、唇を使い、さまざまな感覚を受け取りながら、やがて自分の手を口へ運び、物を舐め、離乳食を取り込み、かじり、噛み、飲み込むことを少しずつ獲得していきます。

「食べる」という行為は、単に栄養を摂るためだけのものではありません。

自分の身体を感じ、動かし、さまざまな感覚を受け取りながら、一つひとつの機能を獲得していく、乳幼児期の大切な発達の過程です。

だからこそ、子どもの「食べ方」を、口だけの問題として見ることはできません。

その子が赤ちゃんの頃、どのように吸い、口を使い、身体を動かしながら「食べる」を獲得してきたのか。その過程を丁寧にたどることで、今、目の前にある小さな困りごとの背景が見えてくることがあります。

本講演では、授乳から離乳、そして幼児期まで、「食べる」という機能がどのように獲得されていくのかを、感覚、運動、姿勢、呼吸、嚥下などを含めた子どもの発達の過程から紐解いていきます。

そして、まだ「病気」や「障害」と呼ばれる状態ではない子どもたちに見られる小さなサインに、私たち大人はどう気づき、どう支えていくことができるのか。

明日から子どもの見方が変わる観察のポイントと、家庭や保育・支援の現場ですぐに活かせる具体的な関わり方を交えながらお伝えします。

歯が生えてから、歯科に行く。
これまで当たり前だったその考え方から、もう一歩先へ。

赤ちゃんの発達を見つめるとき、「口」は、生まれた直後からその子の機能の獲得を観察できる大切な入り口の一つです。

赤ちゃんの頃から「食べる」を見守ることが、子どもの健やかな発達を支える予防につながっていく。

そしてこれから、歯科がその早期支援を担う場所の一つになっていくことを願っています。

イベント問い合わせ：天理市役所　健康・こども家庭局　健康推進課（0743）63-9276
主催：山辺・天理歯科医師会　共催：奈良県歯科衛生士会